

可約指數について — 鈴木氏の話への introduction

愛媛大 理 青山陽一

このノートでは、可約指數に関し筆者が興味を感じたことについて記し、鈴木氏の話への introduction としたい。時代順に論文をピックアップして書いていくが、関係のある論文をすべてリストアップしたものではない。以下、 A は極大イデアル族を持つ d 次元のネーダー局所環であるとする。 \mathfrak{q} を既素イデアル、 $\mathfrak{q} = \mathfrak{q}_1 \cap \dots \cap \mathfrak{q}_r$ を既約イデアルによる無駄のない分解とするとき、 t は分解の仕方によらないこと、及び $t = l(\mathfrak{q}; A/\mathfrak{q}) = \dim_{A/\mathfrak{q}} \text{Hom}_A(A/\mathfrak{q}, A/\mathfrak{q})$ であることが知られている。([1, Satz IV] なお [3] を参照)

[1] E. Noether, Idealtheorie in Ringbereichen, Math. Ann. 83

(1921) 24 - 66.

この不变量 t を \mathfrak{q} の可約指數と呼び、 $ir(\mathfrak{q})$ 或いは $N(\mathfrak{q})$ で示す。
([3, Definition 2]) Gröbner は “ A が regular のとき、任意の parameter ideal (= s.o.p. で生成された ideal) は既約である” を示

した。（彼の定理の元の形を現在の用語で書くと，“ R を Cohen-Macaulay 整域, \mathfrak{a} を principal ideal class (i.e. $\text{ht } \mathfrak{a} = v(\mathfrak{a}) =$ 極小生成系の個数), \mathfrak{p} を \mathfrak{a} の素因子で $R_{\mathfrak{p}}$ が regular なるものとするとき, \mathfrak{a} の \mathfrak{p} -準素成分は既約”）（[2, Satz]）

[2] W. Gröbner, Ein Irreduzibilitätskriterium für Primäridenteale in kommutativen Ringen, Monatsh. Math. 55(1951) 138 - 145.

Northcott は上の結果を次の様に拡張した。“ A が Cohen-Macaulay のとき, parameter ideal の可約指数は A.O.P. のとり方に依らない A の不变量である。”（[3, Theorem 3]）

[3] D. G. Northcott, On irreducible ideals in local rings, J. London Math. Soc. 32(1957) 82 - 88.

ここで鈴木敏氏(京大教養)より教えてもらった(1975夏)証明法を書いておこう。まず2つ補題を用意する。(証明は略す)

Lemma 1 (S.Suzuki). R を環, M を R -加群 ($\neq 0$), $M \supset (0) = N_1 \cap \dots \cap N_t$ を既約部分加群 ($\neq M$) による分解とするとき, 次は同値:

- (a) $M \xrightarrow{\text{nat.}} M/N_1 \oplus \dots \oplus M/N_t$ が essential monomorphism である。
- (b) 分解に無駄がない。

Lemma 2 (?). R を環, M を R -加群 ($\neq 0$), N を M の essential 部分加群, $M \supset (0) = Q_1 \cap \dots \cap Q_t$ を無駄のない既約分解とすると, $Q'_i = Q_i \cap N$ は N の既約部分加群で, $N \supset (0) = Q'_1 \cap \dots \cap Q'_t$ は無駄のない既約分解である。

(Proof of [3, Theorem 3]) d に関する帰納法。 $d=0$ のとき, $0:\mathfrak{m} \subsetneq A$ は essential だから Lemma 2 よりベクトル空間の話になる。
 $d=1$ のとき。 x, y を非零因子とする。 $A/(y) \xrightarrow{\cong} A/(xy) \hookrightarrow A/(xy)$ が essential であることを示し, Lemma 2 を使い $\text{ir}(y) = \text{ir}(xy) = \text{ir}(x)$ を得る。 $d > 1$, $d-1$ まで正しいとする。 $x_1, \dots, x_d, y_1, \dots, y_d$ を各々 s.o.p. とする。 $\exists z \text{ s.t. } x_1, \dots, x_{d-1}, z, y_1, \dots, y_{d-1}, z$ が各々 s.o.p. だから帰納法により主張を得る。(by S. Suzuki) (g.e.d.)
 更に Northcott-Rees は次の興味ある定理を証明した。“任意の parameter ideal が既約ならば, Cohen-Macaulay である。” ([4, Theorem 1])

[4] D. G. Northcott & D. Rees, Principal systems, Quart. J. Math. Oxford (2) 8(1957) 119 - 127.

ここで, 下田の補題を使う山岸氏の証明を紹介しよう。

Lemma (Shimoda). $a(\neq 0) \in \mathfrak{m}$ で, $0:a = 0:a^2$ とする。 (a^2) が既約ならば, a は非零因子である。

(Proof of [4, Theorem 1]) a_1, \dots, a_t を sub-s.o.p. とする。任意の e_1, \dots, e_t に対し $(a_1^{e_1}, \dots, a_t^{e_t})$ が既約ならば a_1, \dots, a_t は regular sequence を示せばよい。 t に関する帰納法。 $t=1$ のときは上の Lemma による。 $t > 1$, $t-1$ まで正しいとする。 $B = A/(a_2^{e_2}, \dots, a_t^{e_t})$ とおく。 $a_1^f B$ は既約 for $f > 0$ だから a_1 は B -regular。 $0:a_1 = \bigcap_{e>0} (a_2^{e_2}, \dots, a_t^{e_t}):a_1 = \bigcap_{e>0} (a_2^{e_2}, \dots, a_t^{e_t}) = 0$ より a_1 は A -regular。 $A/(a_1)$ で考えて帰納法により主張を得る。(by Yamagishi) (g.e.d.)

Berger は 1 次元 Gorenstein 局所環（彼の用語では *unvergabelt*）の研究を行ない、その中で “1 次元 Cohen-Macaulay 局所環で極大イデアルが 2 個の元で生成されるものは Gorenstein である” を示し、その様な局所環を分類した。([5, Satz 2 & Satz 4])

- [5] R. Berger, Über eine Klasse unvergabelter lokaler Ringe,
Math. Ann. 146(1962) 98 - 102.

Endo-Narita は Berger の結果を次の様に拡張した。“ A の parameter ideal の可約指数が s.o.p. のとり方によらない A の不变量で、それが $d+1$ 個の元で生成されるならば、 A は Gorenstein である” 更に，“Cohen-Macaulay でなくして、parameter ideal の可約指数が s.o.p. のとり方に依らない局所環が存在する” ことを示した。
([6, Theorem 1 & Theorem 2])

- [6] S. Endo & M. Narita, The number of irreducible components of an ideal and the semi-regularity of a local ring, Proc. Japan Acad. 40(1964) 627 - 630.

今まで述べてきたようなところから、可約指数の概念は重要なものであろうと思われるし、（事実、Cohen-Macaulay 環の場合には重要な役割を持ち、その理論が作られている）その役割はどうなのであろうかという想いがする。Cohen-Macaulay でなくして parameter ideal の可約指数が s.o.p. のとり方に依らない局所環は存在するし、また parameter ideal の可約指数が s.o.p. を

動かしたときに有界でないような局所環も存在する。そこで
ます、可約指數一定の局所環、或いは可約指數有界の局所環
は、どの様なものであろうかと云う疑問が湧く。そして、そ
の様な場合に他の不变量との関係はどうかとか。そして更に
は.....

何かしら訳の判らない、まとまりのないものを書いてきてし
まつたが、最後に文献を補足して、このノートを終ることに
したい。

[7] H. Bass, On the ubiquity of Gorenstein rings, Math. Z. 82
(1963) 8 - 28.

[8] G. Eisenreich, Zur Syzygientheorie und Theorie des inversen
Systems perfekter Ideale und Vektormoduln in Polynomringen
und Stellenringen, S.-B. Sächs. Akad. Wiss. Leipzig, Math.-
Nat. Kl. Band 109 Heft 3, Akademie Verlag, 1970.

[9] W. Gröbner, Über irreducible Ideale in kommutativen Ringen,
Math. Ann. 110(1934) 197 - 222.

[10] W. Gröbner, Moderne algebraische Geometrie, Wien-Innsbruck
1949.

[11] W. Krull, Idealtheorie (zweite, ergänzte Auflage), Ergeb.
Math. Grenz. 46, Springer Verlag, 1968.

[12] F. S. Macaulay, The algebraic theory of modular systems,

Camb. Univ. Press, 1916.

- [13] H. Seydi, Une remarque sur les anneaux de Cohen-Macaulay,
Bull. Sc. Math. (2) 96(1972) 155 - 160.